

キリシタン時代のリベラルアーツ教育

山田 耕太

1. はじめに

筆者は最近、ギリシア・ローマ時代から現代に足るまでのヨーロッパと北アメリカのリベラルアーツの歴史を見渡した上で、現代日本の大学の進むべき方向を示した。⁽¹⁾

それと同時に「日本で最初のリベラルアーツ教育は、いつどこで始まったか」という問いをかなり以前から懐いていた。最初はそれが幕末から明治維新前後の洋学校から始まったのではないかと思っていた。しかし、十数年前に安土のセミナリヨ跡を訪ね、その頃に島原半島の原城跡近くの有馬や加津佐のセミナリヨ跡を訪れてからキリシタン時代のセミナリヨやコレジョではないかと漠然と感じていた。だが、10年近く前と昨年に天草の河内浦にある天草コレジョ跡に建つ天草コレジョ館を訪れてから確信に変わった。それではキリシタン時代のいつ、どこで、どのようなリベラルアーツ教育が始まったのであろうか。

2. イエズス会の教育⁽²⁾

イグナティウス・デ・ロヨラ（1491年生-1556年没）は、ルターの宗教改革から23年後の1540年にイエズス会を立ち上げて正式な修道会として公認された。

「イエズス会が設立された目的は、特に公の説教、および神の言葉を告げるために従事し、種々の霊操を与え、またキリスト教的な博愛・慈善の業を果たし、とりわけ子どもや無学な人びとにキリストの福音を教えさとし、さらに告白やその他の秘跡を授けてキリスト者を力づけ、こうして人間が実生活の面でも、キリストの教えを理解する面でも進歩するように、そしてキリストへの信仰が広まるように努めることである。」

イエズス会は、当初は大学で講義や学問研究をすることを目的としてはいなかった。しかし、人文学や哲学・神学の勉強のために、既存の大学に学生を派遣するために「コレギウム」を始めたが、通える大学が近くにないことなどが動機となり、教授資格を有する教員を配して、自前でイエズス会士を育成するためのイエズス会員専用の「コレギウム」に次第に発展していった。その数は1540-56年で21校に上る。次に、イエズス会以外の一般の青少年を受け入れるタイプが生じ、やがて一般青少年を第一の対象とする対外的「コレギウム」が生まれた。その数は、1546-1556年の間で36校が開校された。このようにして、イグナティウスの生前にさまざまなタイプのイエズス会の高等教育機関が生まれた。

イエズス会コレギウムは、最初のイエズス会員専用コレギウムである「パリのコレギウム」をモデルにした次の4段階の「パリ方式」で行われていた。

(1) 諸学の土台としてラテン語文法（初級文法、中級文法、上級文法）。

【語学クラスは能力別・学力別編成で、低い段階から高い段階へ段階的履修】

(2) 人文学課程（人文学、修辞学）

(3) 哲学課程（論理学、自然哲学、倫理学、形而上学）

(4) 神学課程（トマス神学大全、聖書と神学大全の関係、旧約聖書・新約聖書）

【講義クラスは同時並行履修ではなく、一時1教科主義で段階的履修】

このような教育課程はイグナティオス・デ・ロヨラが定めた『イエズス会会憲』（1550年）でも裏付けられる。すなわち、神学の研究には「人文学、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語の知識を必要とし」、⁽³⁾「自由学芸や自然学（哲学）も有益である。それらは神学への精神を準備し」、⁽⁴⁾「哲学、論理学、自然学、倫理学、形而上学において、アリストテレス説が教えられるべきである。⁽⁵⁾」⁽⁶⁾「神学においては旧約聖書と新約聖書、聖トマス説のスコラ学が読まれ、実証的著者からは私たちの目的によく合致するものが選択されるべきである。」

3. ヴァリニアーノの宣教教育政策⁽⁷⁾

1549年にフランシスコ・ザビエル（1506年生-1552年没）が来日して以来、九州から関西にかけて西日本でキリスト教は広まっていった。イエズス会日本教会は1581年にはゴアに本部を置く東インド管区に留まりつつも一歩独立して準管区を形成した。そしてインドで成功したように、日本でも子供の教育に力を入れ、寺子屋の教育に倣って、教会学校を中心にして子供を教育していった。しかし、伝道者や司祭の育成や教育、ならびに日本人がイエズス会士に加わるか否か、という成人教育に関しては、指導者の間でも意見が対立していた。

日本の宣教の最高責任者であったポルトガル人のフランシスコ・カブラル（1533年生-1609年没。日本布教長1570-81年）の日本人観は、「決して好意的なものではなかった。彼は日本の政治は野蛮であり、国民は偽善的である。領主達は打算的でキリスト教や自分たちイエズス会員を南蛮貿易に関連してしか考えていない⁽⁸⁾」というものであった。それに対して、京都で孤軍奮闘していたルイス・フロイス（1532年生-1597年没）を助けるために来日したイタリア人のオルガンティーノ・ソルド（1530年生-1609年没）は、それとは正反対に次のように日本人を高く評価した手紙をカブラルに宛てて書いた。

「私達は、当都〔注、すなわち京都〕全域の改宗に大いなる期待を寄せており、尊師〔注、カブラル〕が私達のもとへ幾名かの良き人々を派遣して援助されることを望んでいる。なぜならば、都こそは、日本においてヨーロッパのローマに当たり、科学、見識、文明はさらに高尚である。尊師、願わくは彼らを野蛮人と見なし給うことなかれ。信仰のことはともかくとして、我等は彼等より顕著に劣っているのである。私は国語を解し始めてより、

かくも世界的に聡明で明敏な人々はないと考えるに至った。ひとたび日本人がキリストに従うならば、日本の教会に優る教会はないであろうと思われる。⁽⁹⁾

このような日本におけるイエズス会の宣教方針を巡る問題を解決し、日本におけるイエズス会の宣教教育方針を定めるために、東アジア全体の巡察師として任命されたイタリア人アレッサンドロ・ヴァリニャーノ(1539年生-1606年没)が、インド諸地方を巡り、マラッカとマカオを経て日本に派遣された。ヴァリニャーノの日本巡察は、第一次(1579-1582年)、第二次(1590-1592年)、第三次(1598-1603年)と併せて三回、通算10年間にわたって日本に滞在した。また、第一次巡察時には『日本諸事要録』(1583年)という報告書を残し、第二次巡察時には『日本諸事要録補遺』(1592年)という報告書を残した。⁽¹⁰⁾

ヴァリニャーノは、第一次巡察で日本人が司祭やイエズス会士になることに反対したカブラレ布教長の任を解くように、イエズス会の総長宛に手紙を認めた。ザビエルと同様に日本人の宣教は日本人の手でと、ヴァリニャーノは考えていた。その当時は約200の教会に約15万人のキリシタンが存在していた。日本管区は三宣教区に分けられた。すなわち「京都」を中心にした「都」教区または「上」教区(織田信長の安土、高山右近の高槻、他。約2万5千人のキリシタン)、「上」と「下」の間の「豊後」教区(大友宗麟の臼杵、大友義統の府内〔すなわち、大分〕他。約1万人のキリシタン)、豊後以外の九州の「下」教区(有馬晴信の有馬、大村純忠の大村、平戸、長崎、天草、他。約11万5千人のキリシタン)である。⁽¹¹⁾

ヴァリニャーノはイエズス会の修道士となるために三種類の教育機関を設立した。すなわち「セミナリヨ」(seminaryo:ポルトガル語「中等教育学校」)、「ノヴィシアード」(noviciado:ポルトガル語「修練院」)、「コレジョ」(collegio:ポルトガル語「高等教育学校」)である。

第一に、セミナリヨである。二種類のセミナリヨが想定されており、一つのセミナリヨは、武士・貴族の子が7歳から17歳まで学ぶ日本人の青少年を対象にしたもので、10歳以前の読み書きの基礎を学んだ後でラテン語の初歩・中級・上級文法を最低2年ずつ6年間に学び、ラテン語の古典を学ぶことを目的とした学校であった。同時に、日本語の読み書きから日本の古典文学や日本の生活習慣、音楽や宗教学を学んだ上で、最終的には説教をすることができることを目的にした学校であった。しかし、日本の学生たちはラテン語を学ぶ少数派と日本文学を学ぶ多数派に分かれていく傾向があった。もう一つの「セミナリヨ」は日本語を母語としないインドから来るポルトガル人などの外国人や混血の青年を対象にして、主として日本語の初級文法から学び日本の古典文学と日本人の文化や生活習慣を学ぶことを目的としたセミナリヨであった。⁽¹²⁾ セミナリヨではラテン語や日本語による「言葉の教育」と古典文学や音楽を通した「人文学」(humanidad)の教育を通

した人間教育に強調点が置かれていた。その後、教理や論理を中心にして神学を学んだ。1580年に島原半島南側の有馬と安土にセミナリヨが建てられた。

第二に、「ノヴィシアード」である。それはイエズス会士でない青年たちを聖職者にする教育施設で、イエズス会の修道士になるために、修道生活を通して精神的な訓練や生活態度を2年間で学んだ。そこでは、「日本のカテキズモ」による教理やイエズス会の規則「イエズス会会憲」などを学び、祈り、信仰告白、告解、洗礼、聖体拝領、埋葬、婚姻などのイエズス会の聖職者に必要な基本的な事柄を実践的に学んだ。⁽¹³⁾ 最終的にはイグナティウス・デ・ロヨラの『靈操』の精神を身につけることを目的としていた。

ノヴィシアードは1580年に、豊後の臼杵に開設され、日本人6人とポルトガル人5人の11人の修練生を受け入れることから始まった。1586年に薩摩藩の島津氏が豊後に侵入した際に山口に移転し、1587年に豊臣秀吉の伴天連追放令が出ると生月島に移転し、その後、大村を経て1592年には天草下島南の河内浦に移転し、1597年には長崎に移転した。ノヴィシアードが開設される以前の1550年から1580年の30年間にイエズス会に入会したのは24人で、その中で日本人は8人であった。その期間中に脱会ないしは放逐された人は7人で、その中で日本人は2人であった。ノヴィシアードが臼杵に開設された1580年から1586年の6年間でイエズス会に入会した人は51人で、その中で日本人は37人であった。その期間中に脱会者は28人で、その中で日本人は20人であった。

第三に、「セミナリヨ」と「ノヴィシアード」を出た後にイエズス会の聖職者となることを目的とした「コレジョ」である。コレジョのカリキュラムの第一段階は、2年間のラテン語文法とイソップ物語などのラテン語の古典文学、日本語文法と『平家物語』『太平記』『倭漢朗詠集』などの日本語の古典文学による人文学課程であった。第二段階として、2年間の論理学講読などによる哲学課程を経て、第三段階の4年間の教理神学と実践神学の神学課程でカリキュラムは構成されていた。コレジョは、1580年に「ノヴィシアード」がある臼杵に近い豊後の「府内」（現在の大分）に開設された。

これらのヴァリニャーノの教育構想は、既にヨーロッパでイグナティウス・デ・ロヨラが『イエズス会会憲』の第四部「イエズス会修道士の学問」「イエズス会の大学」などで述べた教育方針と基本的には轍を一にするものであった。そのなかで「セミナリヨ」は宣教地である日本でイエズス会士以外に広く開かれた語学を中心とする学校であり、「コレジョ」は聖職者になるためにもっぱらイエズス会士に限られた学校であった。しかし、ヴァリニャーノには、ラテン語とラテン語の古典文学ばかりでなく、日本文化に適応して日本語と日本の古典文学、ならびに日本文化や習慣を学ぶ点において、ヨーロッパには見られない現地の文化を尊重する「適応主義」が見られる特徴があった。⁽¹⁴⁾

このような「セミナリヨ」「ノヴァシアード」「コレジョ」によるイエズス会の教育体系は、

1587年の豊臣秀吉による伴天連追放令にもめげず、1580年から徳川家康のキリシタン禁教令が出て大迫害が起こる1614年まで34年間続いた。

4. 有馬のセミナリヨ、安土のセミナリヨ⁽¹⁵⁾

(1) 有馬のセミナリヨ (1580～1599年)

有馬のセミナリヨは1580年の復活祭に、有馬晴信の日野江城下を開校し、最初は22人の生徒が学び始めた。その中には、後に遣欧少年使節団に派遣される伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルティーノ、中浦ジュリアン、コンスタンティノ・ドゥーラドも含まれていた。専任教師陳は院長・幹事・舎監という管理者の他に、ラテン語教師、ラテン語も教える哲学講師、倫理学講師、論理学講師、日本語も教える日本文学講師、児童学校教師、説教師（チャプレン）など10人前後で構成されていた。その後、1587年3月長崎・浦上に移転、1587年7月に豊臣秀吉の伴天連追放令が出されると翌年1月に島原半島の山際の八良尾（はちらお）に移転、1589年4月島原半島西の加津佐に移転、1591年5月に八良尾に戻った。1595年6月八良尾セミナリヨが消失し、有家に移転し、1597年9～10月に有家セミナリヨは閉鎖。1598年8月に長崎で新たなセミナリヨを創設、1599年3月に天草の河内浦に移転し、同年8月天草の志岐に移転、1600年長崎に移転したが、1601年10月に長崎の火災で焼失し、有馬に戻り、1612年6月にイエズス会士が有馬から追放されるまで存続した。1600年以後は、音楽講師のオルガン奏者や合唱隊指揮者なども加わり、教師陣は充実していた。

ヴァリニャーノが定めた「セミナリヨ内規」によると、全寮制の生活は次の通り。

- ① 夏季4時半起床司祭らと5時まで祈祷。冬季（10月中旬～2月中旬）1時間遅れ。
- ② 祈祷後ミサ、主祷文を唱える。6時までの残り時間は座敷の清掃。
- ③ 6時から7時半まで学課の勉強。年少の者は教師の指示でラテン語の単語を学ぶ。
- ④ 7時半から9時までラテン語教師に、宿題を見せ、暗唱したことを報告する。
- ⑤ 9時から11時まで、食事を取り、休憩する。
- ⑥ 11時から2時まで、日本語の読み書き。できる者は日本語教師の指示に従って書状を認める。教師は学課を訊ねたり、習字を直したりして、生徒が上達するようにする。
- ⑦ 2時から3時まで、唱歌（グレゴリオ聖歌）や楽器（クラヴィオ、ヴィオラ、オルガン、ギター）の演奏を練習し、残りの時間は休憩する。
- ⑧ 3時から4時半まで、ラテン語教師の指導の下で、一つの文章を書かせ、彼らが進歩するのに最もよい文章を語り聞かせる。年少者はラテン語の文章の読み書きをする。5時までの半時間は自由時間。
- ⑨ 5時から7時まで夕食を取り、休憩する。

- ⑩ 7時から8時まで、ラテン語の復習。年少者は日本文字、ローマ字の学習など。
- ⑪ 8時に良心の糾明（反省）をし、聖母の連祷（夕べの祈り）をして就寝する。
- ⑫ その週に休日がない場合、水曜日に2時間だけ日本語の読み書きをして、1時から自由時間。しかし、しばらく聖歌の合唱、楽器の練習をする。
- ⑬ 土曜日の午前中は、その週に学んだラテン語の復習に専念する。食事後、2時間日本語の読み書きをし、1時に学校は終わる。その後の自由時間は入浴や散髪、告白に時間を充てる。夕食後は休憩し、残る時間はその前半に行われる霊的な話を聞き、後半は聞いた説教や教義について話し合う。
- ⑭ 日曜日や祝日には昼食後、別荘か野外に行って休養するか自由にする。雨が降る日や寒い日には室内で休養する。音楽をする者は合唱や楽器の演奏に時間を充てる。
- ⑮ 夏季の非常に暑い日は、校長の判断により勉学から解放して休暇を取らせ、数日間休養を取らせる。

ここからもセミナヨリではラテン語と日本語と音楽を中心に学んでいたことが分かる。

(2) 安土のセミナリヨ (1580～1588年)

京都に建設が予定されていた都のセミナリヨは、土地取得が難しかったので、オルガンティーノが織田信長に用地を請願すると、安土の土地が与えられて、そこにセミナリヨが創立された。日本文化を高く評価したオルガンティーノ初代院長ともう1人の司祭（パードレ）、1人のラテン語教師と1人の日本語教師と2人の助手という4人の修道士（イルマン）で構成されていた。だが、1582年に明智光秀による本能寺の変で織田信長が暗殺され、安土城とその城下にあったセミナリヨも劫火の犠牲となった。セミナリヨは先ず京都に移転し、次いでより安全な高槻に移転したが、1585年に高山右近が高槻から明石に転封されると大阪に移転し、1587年に豊臣秀吉の伴天連追放令が出されると九州の生月島に移され、そこから長崎を経て、1588年には有馬のセミナリヨと合併した。合併した時の安土の学生は19人（すべて日本人）、それに有馬の学生は51人（内ポルトガル人3人）と合わせて70人となった。



5. 府内のコレジョ、天草のコレジョ、長崎のコレジョ⁽¹⁶⁾

(1) 府内のコレジョ (1580～1586年)⁽¹⁷⁾

コレジョは1580年に大友宗麟の斡旋により白杵に近い府内（大分）の城下で始まった。正式な名称は、ヨーロッパやインドのゴアやマカオのコレジョと同じ「聖パウロ学院」で

あった。開設当初はポルトガル人のフィゲレイド院長とイタリア人のラテン語教師アントニオ・プレネスティの2人の司祭、2人のポルトガル人修道士と2人の日本語教師の日本人修道士という教師陣で構成されていた。最初の入学生は2、3年前に修練を済ませてイエズス会に入会した20歳前後のポルトガル人学生5人であった。

コレジョの第一段階は、「人文学課程」であった。言葉によって人格が形成され、正しく話せる人が人格者と考えられていたので語学の習得に力が入れられていた。1580年にはラテン語の文法が始められ、1582年には修辞学が開講される予定であった。また、もう一つの言語としてヨーロッパで教えられるギリシア語やヘブライ語の代わりに、日本語の文法と古典文学の学習が充てられた。日本語の学びのために日本語の文法書と辞書ならびに数種類の日本語教科書が作られた。

第二段階の「哲学課程」は1583年から始まった。当初は都教区に開設されるコレジョで「哲学課程」「神学課程」をする予定であったが、本能寺の変以後の情勢の変化で都教区にコレジョを開設することができなくなったので、府内で教育することになった。1583年にはヴァリニャーノの斡旋でポルトガルのコインブラ大学で哲学を教えていたペドロ・ゴメス司祭が府内に着任し、その指導の下でプレネスティノがローマの教皇庁コレジョで教えていたフランシスコ・デ・トレド司祭の著わした「論理学」の概要を毎日2時間講義し、最初は4人のポルトガル人学生が受講した。

第三段階の「神学課程」は1585年から始まった。ペドロ・ゴメスが「教理神学」を講じ、プレネスティノが「実践神学」として「秘跡」の講義を始めた。5人のポルトガル人学生が履修した。しかし、1585年秋から島津氏と大友氏の争いが顕著になり、1年近くコレジョの教育を中断し、翌1585年秋に再開したが年末には府内のコレジョを閉鎖した。約6年間の府内のコレジョで学んだ学生は計18人であった。そのうち16人はポルトガル人であった。日本人はラテン語を学ぶのに時間がかかり、1585年からラテン語を始めた2人に過ぎなかった。目標に達して司祭になったのは6人ほどで少なかった。

コレジョを1587年1月から8月まで山口に移した。同年7月末に豊臣秀吉のキリシタン伴天連追放令が出されると、8月から年末は平戸を経て生月島に、1588年前半は長崎の千々石に移転したが、その間教育活動は行われなかった。1588年8月頃から1年間は島原半島南側の有家でラテン語や日本語の教育が再開されたが、学生は13人であった。1590年8月頃から1591年5月まで島原半島西の加津佐に移転して、セミナリヨと共通のラテン語の初級・中級・上級・ラテン語古典読解の4クラスが開かれた。

(2) 天草のコレジョ⁽¹⁸⁾

1591年初頭には、豊臣秀吉のさらなる弾圧を察知したイエズス会の人々の往来が頻繁

な加津佐からさらに安全な天草下島南の河内浦にコレジョを移したが、そこにノヴィシアードが大村から移転してきて、コレジョとノヴィシアードは同じ建物を共有することになった。天草のコレジョの教育活動には特筆すべき点が3点ある。

第一に、ペドロ・ゴメスは府内でコレジョの哲学・神学教師としてばかりでなく豊後教区長としても働いていたが、1590年以降には日本イエズス会全体の責任者（準管区長）として重責を担っていた。その忙しい合間を縫って、1592～93年に「哲学課程」「神学課程」の教科書『イエズス会日本コレジョの講義要録』を執筆した点である。それはコレジョの教科書として使われるようになった。ゴメスはその当時ヨーロッパのコレジョで用いられていたトレドのアリストテレス『弁証論』『論理学』『物理学』『靈魂論』の解説書などを咀嚼した上で、三部構成のオリジナルな教科書を書きあげた。第一部前半「天球論」では、自然科学の立場から天文学・地質学・気象論の問題を対象として科学的実証に基づいてキリスト教教理を論じ、第一部後半「四大論」ではトマスの『アリストテレス注解』に基づいて月下の世界の物質について論じている。第二部「靈魂論」ではトマスの『アリストテレス靈魂論注解』に基づいて植物や動物に特徴的な「植物的アニマ」や「感性的アニマ」とは異なる人間に特徴的な「知性的・理性的アニマ」という点から人間論が展開されている。第三部「真実の教え」という「神学論」ではトリエント公会議で定められた「ローマ・カテキスモ」（公教要理）に基づいて、新たに体系化された教理神学の本質が解説されている。すなわち、この『日本コレジョの講義要録』によって天体論、物質論、靈魂論（人間論）などその当時のヨーロッパの科学思想が初めて日本にもたらされると同時に、それらの科学思想を土台にしてキリスト教の世界観と思想が初めて説かれた点に特徴がある。また、それは新井白石などに見られるように、その後の日本文化にインパクトを与えていった。⁽¹⁹⁾

第二に、天正遣欧使節団の中でコンスタンティノ・ドゥーラドがヨーロッパで印刷術を学んで、ゲーテンベルクの印刷機を持ち帰っていた。その印刷機を用いて、いわゆる「天草本」と呼ばれるコレジョの教科書が印刷された点である。すなわち、現存する出版物では（1）辞典類：『ラテン文典』『羅葡日典』、（2）古典文学書：『平家物語』『エソポのファブラス（イソップ寓話）』『金句集』、（3）信仰教理書・典礼書：『ばうちすも（洗礼）の授けよう』『ヒイデス（信仰）の導師』『どちりいな・きりしたん（キリスト教の教理）』、（4）修養書：イグナティウス・デ・ロヨラ『靈操』『コンテンプス・ムンジ（トマス・アケンピス『キリストに倣いて』）』『コンペンディウム・スピリツアーリス・ドクトリナエ（精神生活綱要）』『コンペンディウム・マヌアーリス・ナヴァリ（告解提要）』などであった。キリシタン本の出版は、コレジョが天草から長崎に移された後も続けられていった。

第三に、従来からの音楽教育とは異なる画学生のための学校、画学舎が設置された点である。キリシタンの増加に伴って個人が所有できる聖画が求められるようになり、それま

での輸入品では供給が間に合わなくなってきた。ノヴィシアードとコレジョが天草の河内浦に移ってくると天草下島西側の志岐城下に画学舎が開設された。ヴァリニャーノが天正遣欧使節団を引率したディオゴ・メスキータ司祭に、印刷機のほかに銅版画の原型や銅版画制作のための備品を一式、水彩画（テンペラ画）や油絵を描く道具を持ってくるように要請していた。イタリア人画家ジョヴァンニ・ニコラオの下で、2人の日本人学生が絵を学んでいた。1593年には画学舎は島原半島の八良尾のセミナリオに移っているが、ローマなどから持ってきた原画を模写したり模刻したりして、ニコラオから8人の学生が水彩画と油絵を学び、5人の学生が銅版画を学んでいた。やがて、「画家たちのセミナリオ」とも呼ばれた画学舎は長崎に移っていった。

天草のコレジョとノヴィシアードは、1592年にはカスティリア人のフランシスコ・カルデロン院長とポルトガル人のメスキータ副院長の下で、ノヴィシアードのイタリア人教師1人、コレジョのポルトガル人1人とカスティリア人教師1人、日本語教師2人、説教をして告解を聞くイタリア人教師1人とカスティリア人1人に、3人の日本人助手とイタリア人助手1人とポルトガル人助手1人で構成されていた。学生は神学の最終段階を学ぶポルトガル人学生6人に、ラテン語初級・中級・ラテン語を学び終えて文学や習字を学ぶ日本人学生が併せて30人いた。その中には天正遣欧使節として派遣されて帰国した原マルティーノ、中浦ジュリアン、伊東マンシヨ、千々石ミゲルもいた。日本語教師は後に『妙貞問答』や『破提字子（はだいうす）』を書いて有名になる不干斎ファビアンであった。

大村純忠とその子善前（よしあき）は、1580年に長崎と茂木港をイエズズ会に寄進した。イエズズ会は1580年から1587年まで、知行地として長崎を治めていた。しかし、サン・フェリペ号事件に端を発して、1597年10月頃に豊臣秀吉の命によって、天草のコレジョは破壊されてしまった。そこで、長崎に移転して、教育を再開した。

(3) 長崎のコレジョ⁽²⁰⁾

長崎のコレジョは、天草のコレジョの院長であったディオゴ・デ・メスキータを院長とし、長崎にセミナリオとコレジョと印刷所が集められて教育が再開された。セミナリオではラテン語の上級文法として「修辞学」が講義されていた。また、コレジョでは教理神学としてペドロ・ゴメスの『講義要綱』が講じられ、1601年から神学課程の最終段階の実践神学として「良心問題」が講じられていた。1595年からマカオのコレジョに哲学課程・神学課程の学生を派遣し始めていたが、1600年にはマカオのコレジョで2人の日本人が神学課程の良心問題（良心判例学）で非常に優秀な成績で合格し、帰国して司教セルケイアから日本人として初めて助祭の叙階を受けた。日本人で司祭になった16人がノヴィシアードを出てからコレジョで学んで叙階されて司祭になるのに平均21年余りかかっていた。原マ

ルティーノ、中浦ジュリアン、伊東マンシヨは優秀で17年と短い方であった。千々石ミゲルは途中で脱落してしまった。日本人はラテン語の修得に手間取ったようで、日本のセミナリヨとコレジヨで学んだポルトガル人が、ノヴィシアードを出てから司祭に叙階される平均よりも5,6年長くかかっている。1580年にコレジヨが開設されてからようやく日本人司祭の養成が実現してきた時期と長崎のコレジヨの活動時期がほぼ重なるのである。

また、天草のコレジヨからグーテンベルクの印刷機を長崎に運んできて、長崎では『日葡辞書』『洛葉集』『詞華集』『ぎやどべかる』『聴罪師の手引き』『教会の秘跡執行の手引き』などが印刷された。1614年に徳川家康のキリシタン禁教令が出ると大迫害が起こり、キリシタンは壊滅的な状況に陥り、セミナリヨ・ノヴィシアード・コレジヨの教育はすべて停止してしまった。

6. マカオのセミナリヨ、コレジヨ⁽²¹⁾

1587年に豊臣秀吉の伴天連追放令が出るとヴァリニャーノは、国内での日本人司祭の養成は困難であることを見通して、マカオに日本人のためのコレジヨを開設することに奔走した。その結果、1594年にマカオにイエズス会のコレジヨ「聖パウロ学院」が開設された。ヴァリニャーノは日本国内で授ける教育はあくまでもマカオ・コレジヨでの学習の準備教育にすぎず、司祭叙階のために求められる基本的な教育はマカオ・コレジヨで行われると考えていた。すなわち、日本に限らずマカオ・コレジヨを東アジアの中心的なコレジヨにしようという構想がその背後にあった。また、ローマの大学やコインブラ大学、サラマンカ大学などのヨーロッパの基準に合うような人文学課程・哲学課程・神学課程の教育を施していた。

日本からは最初に1595年10月に5人、1596年3月に5人の学生がマカオ・コレジヨに派遣された。そのうち、日本人は3人であった。残りはポルトガル人で、そのうち5人は司祭叙階を受けるため、その後日本に帰国した。また、日本人3人はラテン語の人文学課程から入り、哲学課程、神学課程を終えて帰国した。その後も毎年若干名がマカオに派遣され、最低でも3,4年はマカオに滞在して勉学に励んだ。天正遣欧使節に派遣された中で、伊東マンシヨと中浦ジュリアンは1601年にマカオ・コレジヨに派遣され、神学課程の良心問題を3年間聴講して、その後試験に合格して司祭に叙階された。マカオ・コレジヨは1598年から1604年まで、学生数は30人前後であったが、1606年から1618年まで10人前後で推移し、その後1桁の学生数になり、1535年に閉鎖した。

1614年の徳川家康の禁教令発布に伴い、大勢の宣教師やキリシタン信徒がマカオに追放されてきた。日本からマカオのコレジヨに追放されたのは、司祭33人、伝道士29人、同宿53人であったがその中にセミナリヨの学生28人とセミナリヨの教師6人が含まれ

ていた。そこでこれらの人々の間で急遽、日本人向けのセミナリヨが創られて学習が再開されたが、教師陣が不足したり財政難であったりして3年後に生徒は7人に減って振るわなかった。その後自然消滅していった。

7. 結びに

キリシタン時代のイエズス会の教育施設「セミナリヨ」「ノヴィシアード」「コレジョ」は、インドのゴアに本部を置くイエズス会の東インド管区が、ヨーロッパのイエズス会の制度をアジアに展開したものであった。その巡察師ヴァリニャーノは、日本での宣教には日本人の聖職者の育成が必須として、ゴアやマカオの「聖パウロ学院」(サン・パウロ・コレジョ)に準じる教育施設と位置付けられていた。そこには6課程の教育が考えられていた。児童の「読み書き計算課程」の初等教育の上に「文法課程」と「人文学課程」で構成される中等教育の「セミナリヨ」である。次に、セミナリヨよりも上級の「文法課程」「人文学課程」と「哲学課程」「神学課程」(後者は「教理神学」と「良心問題」という「実践神学」の二課程に分かれる)で構成される高等教育の「コレジョ」である。⁽²²⁾ セミナリヨはイエズス会士にばかりでなく他の人々にも広く開かれた学校であるが、コレジョはイエズス会士にのみ開かれた学校である。そこでイエズス会士になるための教育施設として「ノヴィシアード」(修練院)が設置されていた。

イエズス会の教育内容を見ると、セミナリヨあるいはコレジョでの言語教育と古典文学による人文学の教育はまさに「文法」「修辞学」というリベラルアーツ七科の中の三科「言葉の学」の二科を学ぶことであった。コレジョの「哲学課程」ではもっぱら「論理学」を学んでいたがこれは三科「言葉の学」のもう一つの科目である。さらに「神学課程」もペドロ・ゴメスの『講義要録』に見られるように、「哲学課程」も含むもので、「天球論」「物質論」「霊魂論」という当時の宇宙論・世界観・人間論を土台にして、神学の専門教育が行われており、教理神学と実践神学の中で「良心問題」という実践的な倫理神学が強調されて教育されていた。これはリベラルアーツ七科の「数学」と呼ばれた四科(「代数」「幾何学」「天文学」「音楽理論」)、すなわち数学に裏打ちされた宇宙論・世界観を土台として、神学教育がなされていたことが分かる。また、音楽教育や美術教育という情操教育も併せて行われており、言葉による理性的な人間教育ばかりでなく、情操教育によってバランスの取れた円満な人間教育が行われていたことも分かる。キリシタン時代のイエズス会の学校教育の中に、日本において最初のリベラルアーツ教育が見られるばかりでなく、現代日本におけるリベラルアーツ教育を考える原点がそこにあると思われる。

註

- (1) 山田耕太「人間の教育としてのリベラルアーツ」『大学時報』vol.372、2017年1月号、12-17頁。
- (2) 高祖敏明「ルネサンスとイエズス会の教育」ピーター・ミルワード・巽豊彦監修『ルネサンス時代の教育・思想』荒竹出版社、1987年、25-59頁、参照。
- (3) イグナティウス・デ・ロヨラ「イエズス会会憲(1550年)」『宗教改革著作集15カトリック改革』教文館、1994年、「本会修学修士の習得すべき学問」No.351-386、361-363頁「本会の大学」No.440~486、366-368頁、とりわけNo.447、367頁。
- (4) 「イエズス会会憲」No.450、367頁。
- (5) 「イエズス会会憲」No.470、368頁。
- (6) 「イエズス会会憲」No.464、367頁。
- (7) アントニー・ウセレル「アレッサンドロ・ヴァリニャーノと日本におけるイエズス会の人文的教養」、ザビエル渡来450年記念行事委員会編『「東洋の使徒」ザビエルII』、上智大学、2000年、52-66頁；高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』「第1部第2章 イエズス会日本管区」、「第3部第2章 キリシタン布教における適応」、八木書店、2001年、37-53頁、578-608頁；五野井隆史『キリシタンの文化』「第4章 キリシタンの学校と教育」、吉川弘文館、2012年、99-143頁、参照。
- (8) 松田毅一「解題Ⅱ ヴァリニャーノの第一次日本巡察について」、ヴァリニャーノ『日本巡察記』（東洋文庫229）平凡社、1973年（1995年）、285-367頁、引用は288-289頁。「解題Ⅰ」と「解題Ⅱ」は、後に松田毅一『ヴァリニャーノとキリシタン宗門』（朝文社、1992年）と書名を変更して再録されている。
- (9) 松田毅一、「解題Ⅱ」、296-297頁。オルガンティーノほどではないにしても、類似の考えは、ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』岩波文庫、1991年にも見られる。
- (10) ヴァリニャーノ「日本諸事要録」、「日本諸事要録補遺」『日本巡察記』（東洋文庫、229）平凡社、1973年（1992年）、1-156頁、159-234頁。
- (11) ヴァリニャーノ「日本諸事要録」「第4章 日本管区の区分、及び同管区、特に下の諸地方において我等が有する諸修院、学院、教会」「第5章 豊後、及び都の修院、司祭館」『日本巡察記』32-45頁。
- (12) ヴァリニャーノ「日本諸事要録」「第12章 日本人のための神学校の必要、並びにその経営方法」、『日本巡察記』77-80頁
- (13) ヴァリニャーノ「日本諸事要録」「第13章 聖職者になる者に示す規則、及びその統括方法」「第14章 イエズス会に受け入れるべき日本人、並びにその試練と教育方法」『日本巡察記』80-88頁。
- (14) 高橋勝幸「『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』に見るA・ヴァリニャーノの適応主義布教方針」『アジア・キリスト教・多元性』第9号（2011年）、31-50頁、参照。
- (15) フバート・チースリク「セミナーヨの教師たち」『キリシタン研究』第11輯（1976年）、27-138頁、参照。
- (16) 高瀬弘一郎『キリシタン時代のコレジヨ』八木書店、2017年、参照。
- (17) フバート・チースリク「府内のコレジヨ」『キリシタン研究』第27輯（1987年）、65-154頁、高瀬弘一郎『キリシタン時代のコレジヨ』八木書店、2017年、2-217頁、参照。
- (18) 今村義孝『天草学林とその時代』天草文化社、1990年、石橋弘子「キリシタン時の青少年教育について一考察：天草のセミナーヨ、コレジヨの目録を中心に」『聖園学園短期大学研究紀要』第30号（2000年）、96-87頁、参照。
- (19) 尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの「講義要綱」』第Ⅰ巻、第Ⅱ巻、第Ⅲ巻、『キリシ

タン研究』第34輯（1997年）、第35輯（1998年）、第36輯（1999年）、教文館。

尾原悟「ヨーロッパ科学思想の伝来と受容」『近代科学思想』下巻（日本思想体系63）、岩波書店、1971年、481-496頁、尾原悟「イエズス会日本コレジヨの『講義要綱』：『二儀略説』と「アニマノ上ニ付テ」」尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの「講義要綱」』第Ⅰ巻『キリシタン研究』第34輯（1997年）、教文館、446-467頁。

- (20) フバート・チースリク「日本における最初の神学校（1601年—1614年）」『キリシタン研究』第10輯（1977年）、1-55頁。
- (21) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店、2001年、参照。
- (22) ヴァリニャーノ「第4章ゴアのサン・パウロ・コレジオについて」『東インド巡察記』（東洋文庫734）、平凡社、2005年、53-79頁。